私の授業実践　教育現場の最前線から

「分かって・できる」身体運動

小室　輝明●京都産業大学現代社会学部助教

はじめに

さまざまな学部・学科がある中で、大学教育は教養教育科目と専門教育科目に分かれている。私は、教養教育科目として「健康」をテーマとした講義・実習「スポーツ科学実習（陸上競技）」と、専門教育科目としてスポーツ実習「陸上競技」を担当している。講義以外は全て実技科目である。

今回は実技科目担当教員としての課題や工夫、悩みなどを担当教育科目別に記述していく。

1　教養教育科目担当教員として

全学部の学生を対象とする教養教育科目である「健康科学実習」と「スポーツ科学実習（陸上競技）」を担当している。健康科学実習については、クラス別に設定されたコースで身体運動を実施するために、内容は異なるものの共通しているのは身体機能計測の実施である。屋内・屋外施設における体力計測では、運動能力を含む全種目について全クラス連携の下に相互に測定を実施し、測定方法および身体機能計測の意義に対する理解を高めている。

計測値を全クラスでとりまとめ、それぞれの計測値を指標として活用できるようにフィードバックを行い、種々の情報を活用し、身体運動の実践を含めてライフスタイルとしての自らの健康管理に資することができるようにしている。

身体機能計測後は、クラス別に身体運動を行っている。私のクラスではバドミントンとバスケットボールを実施し、その体験による情報収集を行っている。各種目については、それぞれにルールがあるが、「健康」を目的とした実習であることと、男女混合クラスであることから、双方とも独自のルールを用いることによって、能力差が生じないように配慮している。まず初めにバドミントンのルールについて、ダブルスの場合、本来はサービス権に順序があるが、実習では全ての学生にサービス権がいきわたるように、得点に関わらずローテーションすることにしている。人数や施設の関係から、ダブルスで実施することがほとんどであり、パートナーを組む時に、初めは

コミュニケーションの図りやすい相手と組むことがほとんどである。しかしながら、これでは実力が偏る傾向もあり、身体を動かすことの楽しさがなくなっていく。そこで、くじ引きでペアの組み合わせを作ることによって、新たなコミュニケーションの場ができ、普段は話すことがなかった人との結び付きが生まれるようにしている。

プレイ面については、慣れないうちはラケットを羽子板のように扱い、シャトルを相手コートに打ち返すこともできない学生がいる（私自身もラケット種目については苦手である）。こういった学生に対しては、どんな打ち方でも構わないので、相手コートに返すことを授業中の課題として与える。そうすることにより、1本でも相手コートに打ち返すことができたときはいい笑顔になっている。

バスケットボールにおいては、ロングパスや早いパスを禁止している。女子学生がキャッチできないことや、突き指のようなケガや障害が発生する可能性があり、体力に優る男子学生が優位となり、女子学生が全く参加できない状況になるためである。得点方法についても、女子学生は通常の2点を3点、スリーポイントシュートは5点にしている。こういった注意点と得点方法により、チーム戦略も女子学生を中心とした戦略となり、女子学生も積極的に参加できるように配慮している。

現在は、二つのスポーツを中心に取り組んでいるが、ゲーム性を重視する一方で、遊び・レクリエーションの要素を加えていくことが今後の課題である。

スポーツ科学実習（陸上競技）は私の専門分野であるが、全学部を対象とする実技科目であり、後述する専門教育科目とは異なる。基本的な運動の多くが含まれる種目であり、あらゆるスポーツの原点である陸上競技を通して，走る・跳ぶ・投げる動作を習得し、楽しさや面白さを学ぶ。

走るという動作は、誰に教わることもなく身に付けたスキルである。こういった当たり前のことに対して新たな発見があることを教える難しさに悩み、履修学生の大半は同時間帯に他科目が履修できなかったために履修したという背景があり、初回の授業はモチベーションがバラバラであった。こうした学生にも陸上競技に興味を持ってもらうことが、初回の授業の取り組みである。ラダーやミニハードルを用いて、走る動作を教えることから始める。特にミニハードルは、倒さないために、走る動作よりも倒さないことに集中でき、失敗しても次は倒さな

いようにするという目標も生まれるために、意欲的に取り組むことができている。こういった取り組みを、初回から3回続けると、学生からは走る以外の種目にも取り組みたいといった希望が出ることもしばしばある。4回目以降は跳躍や投擲種目に移行する。幅跳びは、それまでに取り組んできたミニハードルなどの動きをうまく活用すれば記録が向上することもあり、学生同士の競い合いが見られるようになる。こういった状況になった時に一番注意しなければならないことは、不整地に着地することによる捻挫である。授業を中断して注意喚起を行うことにより、現在までにこういった事例は出ていないが、今後も安全面への配慮が必要である。

その後は走り高跳びに取り組むが、この時には15名の少人数ではあるもののクラスとしての形ができてきたことが確認できる。自分の限界を知り、技術向上のために他者を観察することができ、好記録で跳躍をする学生に対して拍手が生まれる。こういった自然の流れができた時には、初回のモチベーションが低かったことは学生自身も忘れているようである。

投擲については、砲丸投、円盤投、やり投の3種目を行う。砲丸投については、大半の学生が未経験者のため、まずは2・721キロの砲丸で実施する。事前に投動作の動きを説明するが、ほとんどが上手投げのフォームで投げることもあり、shot put の意味を説明することによって上手投げが修正されていく。

円盤投については、ゴム製の円盤を準備して、初めに1・0キロから実施している。円盤投げは今学期から取り入れたものであるが、新たな発見もあった。それは、テレビなどでも見る機会が少ないために、フリスビーの投げ方を真似る学生がいたことである。この学生は毎週試行錯誤しながら挑戦を続けており、飛距離も当初よりも飛躍的に伸びた。

やり投げについても、今学期から取り入れた種目であるが、実際のやりでは、取り扱いが不慣れなために学生自身がケガをする恐れもあるので、ターボジャブを用いている。今ではこの授業の人気種目になっている。その背景には、公園などにおけるキャッチボールの禁止など、発育発達期・青年期において投動作を積極的に実施することができない環境になっていることも考えられる。こういった興味・発見を与えてくれた学生には感謝をしたい。

2　専門教育科目担当教員として

専門教育科目として、スポーツ実習「陸上競技」を担当している。1年生を対象とする実技科目であり、教員免許取得の必修科目である。

陸上競技の走・跳・投を中心としたそれぞれの生理学的、バイオメカニクス的特性など、ヒトの基礎的な動作の分析と理解、個人の技術・体力の向上を目指して、合理的な身体の使い方および動きの改善方法を学習・習得するとともに、各個人の課題を発展的に解決する。また、各種目の練習法および指導法についても理解する。

この授業で大切にしているのは、「分かって・できる」運動へと導くにはどうすべきかについて、その道筋を示しながら、教える側の立場に立って取り組めるようにすることである。

これらの目的を達成するためには、理論と実践が不可欠である。短距離（100メートル、ハードル、リレー）、長距離、跳躍（幅跳び、高跳び）、投擲（砲丸）の7種目を行い、各種目の特性については、講義も用いて理解を深めることにしている。履修者は1クラス25名程度であるが、安全面や質を考慮するとこれが限界の人数である。昨年度に新設された学部学科のため、幸いにも学生のモチベーションが高く、学ぶ姿勢があり、理解度も高かったために、1年目はスムーズに終えることができた。

しかし、「理論が先か?、実践が先か?」という課題が浮き彫りになったことも事実である。理解度の異なる学生が受講したときに授業の進行速度の問題などが発生し、時間が足りない状況に陥ることがあると考えられる。学生―教員間の対話シートや授業評価などを活用しながら、この問題の解決の糸口を見つけたいと考えている。

「身体活動」を中心に、これまでの私の授業実践とは異なる視点から執筆をすることになったが、非常勤講師を経験しながら、「教育とは何か?」といった疑問を抱え、専任教員として着任した初年度（昨年度）に、幸いなことに日本私立大学連盟のFD推進ワークショップに参加する機会に恵まれた。模擬授業を通じて、他大学の先生方と貴重な情報共有をすることができ、私自身の教育方法を見直す上で非常に参考になった。今後も一つ一つの課題と向き合いながら、学生にとって少しでもより良い授業が展開できるよう努力していきたい。

聖学院大学心理福祉学部

「良き隣人」になるために学ぶ

――現代人の心理・社会的課題と支援を学ぶ聖学院大学心理福祉学部

古谷野 亘●聖学院大学心理福祉学部長、人間福祉学部長、教授

1 心理福祉学部の誕生

聖学院大学は1988（昭和63）年に現在地の埼玉県上尾市に創立され、30周年を迎えた。大学としての歴史は比較的短いが、法人の歴史は1903（明治36）年の聖学院神学校創立にさかのぼる。建学以来、プロテスタント・キリスト教の精神と伝統を受け継ぎ、「神を仰ぎ人に仕（つか）う」を建学の理念として堅持してきた。近年は、この建学の理念をより具体的に表現した「良き隣人となる」を大学教育の目標として掲げている。

「良き隣人」とは、新約聖書のルカによる福音書に記された「善きサマリヤ人」の例えから引かれた言葉である。2000年前の中東で、強盗に襲われ瀕死の重傷を負ったユダヤ人の旅人が路上に倒れていた。そこを通りかかった祭司とレビ人は、当時の社会では尊敬されていた人々であったが、かかわりになることを恐れ、見て見ぬふりをして通りすぎていった。次いで通りかかったのは、当時のユダヤ人から軽蔑され、差別されていたサマリヤ人であったが、彼はけが人を介抱し、必要な経費も負担した。けがをした旅人の隣人となったのは、このサマリヤ人であった。「あなたも同じようにしなさい」と、キリストはユダヤ人の学者を諭したとされている。

北キャンパス

高度に複雑化し、ある意味で豊かになった現代社会では、「良き隣人」になるためには相応の知識や技術が求められる。例えば、第二次世界大戦に敗れた直後の日本には多くの戦災孤児がいた。それらの子どもたちの惨状に心を痛めた一部の大人たちが、安全で清潔な住居と食事、そして教育の機会を提供する事業を始めた。「良き隣人」となったのである。その事業の多くは今日まで続き、児童養護施設として存続している。しかし、そこに暮らす子どもたちの状況は全く異なっている。虐待などによって心に傷を負い、生きる力を削がれた子どもが少なくない。かつてのように衣食住に事欠く子どもの隣人になるのとは異なり、相当以上の知識や技術が必要なのである。

被災地 岩手県釜石市へのボランティアスタディツアー「サンタプロジェクト」

聖学院大学では、建学の理念に基づいて、「良き隣人」となる人材を育成する人文学部人間福祉学科を1998（平成10）年に開設し、社会福祉士と精神保健福祉士の養成を行ってきた。その後、2004（平成16）年に人間福祉学科と児童学科が人文学部から独立して人間福祉学部となり、さらに2012年には人間福祉学部にこども心理学科が加わった。こども心理学科は、現代社会において多くの子どもが負っている心身の問題や課題に心理学的に取り組む学科として開設された。加えて、2011年の東日本大震災によって顕在化した、被災地の子どもの心のケアに取り組むことを使命としてきた。

2018年、大学創立30周年を期して学部学科の改組を行い、児童学科を人文学部に移し、人間福祉学部に残るこども心理学科と人間福祉学科を統合して心理福祉学科を開設した。この改組により1学部1学科となったので学部名も変更し、心理福祉学部と心理福祉学部心理福祉学科が誕生する運びとなった。

2　心理福祉学科の学び

心理福祉学科では、現代人の心理と現代社会の福祉的課題を扱う多くの講義科目を開設し、学生が関心に応じて選択できるようにしている。その上で、体系的な学習を容易にするために三つの履修モデル、すなわ

ち「共生社会創成コース」「心理学コース」「福祉学コース」を設定している。「共生社会創成コース」は本学科における学修の基本となる履修モデルであって、心理学を主とするモデルと福祉学を主とするモデルに分かれる。心理学を主とするモデルでは、心理学の基礎と考え方を学び、社会のさまざまな場面において、心理学の知識をもって共生社会の実現に寄与できるようになることを目指し、福祉学を主とするモデルでは、現代社会の福祉的課題と現代人の心の問題について学び、共生社会の実現に寄与できるようになることを目指す。

「心理学コース」では、心理学を主とする「共生社会創成コース」の学びに加えて、心理学の実験と実習を履修する。心理学に関する専門的な知識と技術の基礎を身に付け、他職種、特に福祉系の職種と協働できる公認心理師となるために大学院進学を目指すモデルである。「福祉学コース」では、福祉学を主とする「共生社会創成コース」の学びに加え、社会福祉援助技術演習と実習、もしくは精神保健福祉援助演習と実習、またはその両方を履修する。社会福祉の理念と現状、課題について学ぶとともに相談援助技術を修得し、さらに相談援助に有用な心理学の知識をも身に付けて、社会福祉士もしくは精神保健福祉士の資格取得を目指すモデルである。

心理福祉学科に入学した学生は、1年次に心理学と福祉学の基礎である四つの講義科目を必修として履修する。すなわち「心理学概論」と「心理学研究法Ⅰ」では実証科学としての心理学の基礎的な考え方、「現代社会と福祉」と「相談援助の基盤と専門職Ⅰ」では現代社会における福祉の意義と目標、福祉的援助の理念などについて学ぶことになる。学生は、これらの科目を通して自己の関心と問題意識を明確化し、2年次以降の履修科目および履修モデルの選択に主体的に取り組むよう促される。

3　心理福祉学科のこれから

高度に多様化・複雑化し変化する現代社会にあって、「生きづらさ」を感じている人は多い。また、社会経済的な格差が拡大しつつある中での貧困の連鎖の解消、心身に障害のある人々の自律・自立支援、高齢者の介護、子ども・子育て支援、権利擁護など、福祉的な課題が重要さを増してきている。本学科の特色は、乳幼児期から高齢期に至る人生全般にわたって現代人が直

面するさまざまな課題について、心理学と福祉学の視点から多面的に学ぶことにある。学生は、心理学と福祉学の専門知識を修得して現代社会に生きる人々の心理・社会的課題を理解し、共感し、支援する能力を培い、「良き隣人」として共生社会の実現に寄与する人材に育っていってほしい。

最初の新入生を迎えた２０１８年度、入学定員１２０名に対して志願者は２６４名、入学者は１３１名であった。学年始めの２カ月を過ぎたところでは、初年次の教育は順調に進んでいるように見受けられる。しかし、いくつかの課題が浮かび上がっているのも事実である。

多くの新設学科がそうであるように、１回生には意欲のある学生が多い。心理福祉学科の場合、それは国家資格を取得して援助の専門職になるという希望であることが多い。有資格の援助専門職は「良き隣人」の一つのかたちであり、その養成は本学科の使命でもあるから、そのような希望をもつ学生が数多く集まるのは喜ばしいことである。しかし、公認心理師の学部課程と社会福祉士・精神保健福祉士の資格課程を４年で修了することはできない。授業料を減免した上で在学期間の延長を認める制度を設けてはいるが、あれもこれもと資格取得に取り組むのが望ましいとばかりはいきれない。また、資格取得に没頭することが望ましい学生生活のあり方でないことはいうまでもない。個々の学生の希望と関心、適性に合わせた学修指導が必要になる。

また、有資格の援助専門職を目指して入学してくる学生の中には、その適性を欠く者も含まれることであろう。そのような学生については、自分の適性を見極め、資格取得に代わる新たな目標と進路を見いだせるように支援していかなければならない。昨年までの人間福祉学科における経験では、これは十分可能ではあるが、時間と手間を要する課題であって、失望させないための工夫が求められる。

有資格の援助専門職は「良き隣人」の一つのかたちではあっても、唯一のあり方ではない。心理学と福祉学の専門知識を修得した人材が求められるのは、心理臨床や福祉の現場ばかりではない。社会のさまざまな場面で、人々の心理・社会的課題を理解し、共感し、支援しつつ共生社会の実現に寄与する人材を育てていくことは、本学部学科に託された重要な使命である。

わが大学史の一場面

日本の近代化と大学の歴史

「本当の教育」を目指してきた100年
――新たな一世紀を歩む成城大学

大友 浩一●成城大学事務局長

1 成城大学の誕生――成城学園の沿革

本学の設置母体である成城学園は、1917（大正6）年に文学博士澤柳政太郎が東京市牛込区（現在の東京都新宿区）に私立成城小学校を創立したことに始まる。文部次官、貴族院議員、東北帝国大学初代総長、京都帝国大学総長などを歴任し、日本の教育界における指導的立場にあった澤柳があえて新しいタイプの小学校を作ろうと決意した背景には、日本の教育が制度的整備を完成させていく一方で、その内容が画一的形式主義に陥っているという現状認識があった。画一的・形式的教育を排し、まさに「本当の人間の教育」の開拓・実践の場として澤柳が注目したのが国民教育の基礎を担う小学校であり、ここに「生きた教育」を具現化すべく、新しい私立小学校の建設が着手された。澤柳が自ら私学を起こすに際し強調したのは「私立学校の精神・生命は、その設立者の精神意見にある」こと、「私立学校は、独特の主義固有の特色なければならぬ」こと、「特色ある主義方法に基づく教育を施さねばならぬ」こと、「理想的な私立学校は、教育上の理想の上に立たねばならぬ」こと（澤柳政太郎「理想の私立学校」より）であった。

成城学園創立者：澤柳政太郎博士

その主張は、澤柳が成城小学校創立に当たり掲げた四つの「希望理想」と呼ぶ綱領にまとめられている。

(1) 個性尊重の教育、附・能率の高い教育
(2) 自然と親しむ教育、附・剛健不撓の意志の教育
(3) 心情の教育、附・鑑賞の教育
(4) 科学的研究を基とする教育

児童の成長に合わせるように、五年制中学校の新設・1922（大正11）年、七年制高等学校の創設・1926（大正15）年、五年制高等女学校の創設・1927（昭和2）年――ちなみに、学園が現在地（現在の世田谷区成城）に移転した1925（大正14）年には、成城幼稚園も併設された。こうして教職員・父母・生徒の協同による、まさに学園の手作り的発展の歴史を通じて、「希望理想」は成城学園の根幹をなす理念として、さまざまな教育実践の中で深く定着していった。

昭和初期の正門付近の風景

澤柳の掲げた「希望理想」からくみ取れる人材育成の目標に関して、戸部順一成城大学現・学長は以下のような私見を述べている。

『若者に対する教育の目標が、成人した暁に社会での居場所を確保できるよう、そのための技術、体力、人格を教授することにあるのは間違いありません。居場所を保証する知識は概ね、これまでに蓄積されてきた経験的あるいは学問的成果から醸成される人生智であり、そのような人生智を教授するという点で、教育には保守的性向が認められ得ます。しかし若者が歩む社会がこれまでのそれと同じであるはずはなく――程度の差こそあれ、いつの時代でも社会は変化してゆく――よって、将来の社会を予測し、その社会での居場所の確保を保証しなければ教育とは言えないでしょう。人生智を基本的な枠組み――これに拘泥しすぎると、畢竟、画一的・形式的教育に陥る危険があります――としながらも、教育には将来を視野に入れることが求められます。第一次大戦の勃発は世界のあり様を大きく変え、変化の影響が日本にも到来することを澤柳は強く意識したはずです。「今や世界は大いなる変化をなしつつある。国際連盟新たになり、民族自決の主義もある程度是認

され、思想上の変化も大なるものがある。……政治上の大変化は教育の施設の上に民本的の色彩を鮮明ならしむと思うが……」と澤柳は「小学校の改造」（『教育問題研究』巻頭論文）の中で説いています。国を動かす力が一握りの人間に集中するのではなく、広く一般国民が国政にあたらねばならなくなるのを予測し、その任に堪えうる国民を育てることが澤柳の新しい小学校の創立に向かった決意の根底にはあるのではないでしょうか。

澤柳が創り出そうとした「これからの国民」のあるべき姿は「希望理想」の四綱領から見えてきます。⑴の「個性尊重の教育」とは、同種・均一的な人間を創ることに満足せず、一人ひとりの天分＝資質に目を遣り、その天分を開花させることを教育的目標とする一方で、自己とは異なる他者の個性・人格を認め、それを尊重することの重要性を会得させる教育であると解釈でき、そこから、他人の意見に盲従することをよしとせず、確立した自己から生み出された意見を持ち、それを発信でき、その反面、徒に自己主張を繰り返すことをせず、異なる意見・主張をよく聴き、自己の見解を修正しうる人間が創出されること、それを教育の理想としたのではと、推察します。独創性と協調性との融合から生まれる人間性を備えることが「これからの国民」には求められる、と澤柳は考えたのではないでしょうか。

教育の語義を「教わり育つ」と、それを受ける側に立って理解することは恐らく正しくないかもしれません。しかし着実な教育成果を望むとき、生徒、学生の「育ちたい」情熱――成城大学では現在、これを「懸命になる気持ち」と換言しています――は不可欠であり、生徒・学生に関心を抱かせる教育内容、生徒・学生を自ら学びへと向かわせる指導上の創意工夫への努力を「自然と親しむ教育」、「鑑賞の教育」、「能率の高い教育」、「科学的研究に基づく教育」といった綱領の言葉に認められるのではないかと思います。』

澤柳の掲げた「希望理想」は特殊な時代にのみ輝きを見せる教育理念ではなく、教育という営為に従事する者が常に心にとどめておくべき普遍的価値を持つ。成城学園が創立百周年を迎えた（２０１７年）のを契機として策定された「第二世紀プラン」のなかにも、「希望理想」はその基幹をなす理念として生きている。

日本社会を牽引する人材が多く輩出した旧制高等学校は1948（昭和23）年に解体され、その教育を継承する高等教育機関として、1950（昭和25）年に新制成城大学が創設された。「成城学園創業の精神に則り個性の暢達を主眼として広く専門の学芸を研究教授し、広角の視野と高度の教養を具えかつ、豊かな個性を持つ社会の先導者を育成するとともに、文化の発展に貢献することを目的」（成城大学学則）として活動を始めた成城大学は、前身の旧制高校の教育方針であった「文理併進主義」に倣い、経済学部と理学部の二学部体制で発足したものの、理学部廃止に伴い新たに文芸学部と短期大学が創設され、リベラルアーツ色の強い人文社会科学系の大学として歩みを始めた。今日では経済・文芸・法・社会イノベーションの4学部（11学科）と経済学・文学・法学・社会イノベーションの4研究科（10専攻）からなる大学院を擁し、比較的小規模ながら自由で伸びやかな学風のもと、「希望理想」に明示されている個性尊重の教育を堅持する特色ある大学として社会に認知されている。

成城大学経済学部第１回入学式（1950年5月）

2　第二世紀の成城教育

成城学園百周年を機に、学園の未来を創造するための指針「第二世紀プラン」が策定され、大学においても、その指針の中核を担う「第二世紀の成城教育」のもと、グローバル社会の中で、自ら考え、行動し、未来を拓く人物の育成※に向け、大学改革をスタートさせている。

教育改革においては、教育の質向上に心がけることを常とし、各学部の専門教育の充実に加え、成城学園伝統の芸術的教養を通じて人間性を強化する「情操・教養教育」、語学的教養を通じて国際性を強化する「国際教育」と、数学的教養を通じて論理的な思考力を強化する「理数系教育」の三本の柱を大切にし、この要素を複合的に教授す

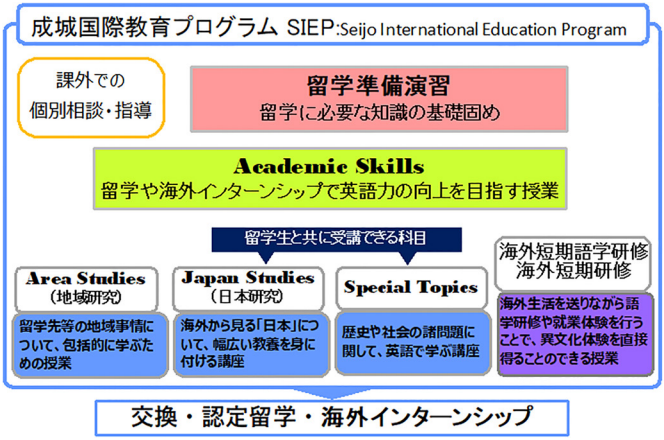
※独立独行
澤柳政太郎が次なる社会を開く力であると信じた青年の生き方で、「自分の信じる道を、自分で開いて往く」の意。

ることにより、人材育成の深化を図っている。

(1)「国際教育」――「成城国際プログラム（SIEP）」

本プログラムは、世界共通語としての英語を実践的に学び、グローバル社会で求められる幅広い国際教養とコミュニケーション能力を身に付けることにより、2年次以降に交換・認定留学や、海外インターンシップにチャレンジする力を養うことを目標としている。

また、語学力の向上を目指すだけでなく、情操教育の一環として、異文化理解を通じ、他者を尊重する姿勢を学ぶ仕組みになっている。さらに、授業の他に、海外留学の個別相談・指導の時間を設け、成城大学独自の留学支援を展開している。



(2)「理数系教育」（データサイエンス科目群）

理数系教育の取り組みとして、成城大学は、データサイエンスに特化した科目群を数多く設定している。AIやビッグデータの利用が必要とされるこれからの時代だからこそ、人文社会科学系である本学が、その専門知識に、情報を活用する知識と技術が学べるデータサイエンスを加えることによって、これまでにない独創性を備えた教養人の育成を目指している。

(3)「情操・教養教育」

本学では、ワンキャンパス、少人数教育の特長を活かし、学部・学科、学年を超えて履修できる「全学共通教育科目」（左表参照）を導入しており、専門科目と並行して履修することにより、総合的な「人間力」を養成している。

また協同性の大切さを、実践を通じて知ってもらおうと、新たな授業外活動の取り組みとして、学内での各種

サポーター制度を充実させている。教え合い、学び合う風景が日常化するようにと、この学生活動を積極的に応援している。

3　新たな一世紀を歩む成城大学

「国際教育」「理数系教育」「情操・教養教育」は、有機的結合を見せる必要がある。すなわち、高い情操を備えた教養人の育成を究極の目標として、互いに教育的影響を及ぼしながら機能しなければならない。「三本の柱」は澤柳の唱えた「希望理想」の21世紀的表現であり、この大学全体の試みと並行して、4学部は「科学的研究を基にする教育」を実践すべく、その指導方法に常に新規さを探求している。経済学部は自由なカリキュラムで主体的に学べる環境を創出し、文芸学部は書く・読む・議論する能力を培う『WRD（ワード）』を必修として、研究する力の向上を図っている。法学部は双方向性授業を取り入れ、思考・発信力を養い、社会イノベーション学部は理論と実践を融合した学びにより、社会をけん引する人材を育んでいる。

戸部学長は「成城大学を面白くする」と語る。その言葉とともに、成城大学は新たな一世紀を歩み出している。

全学共通教育の理念		
多様化する社会、文化を理解する	批判的かつ創造的な思考力を培う	コミュニケーション能力を強化する
必要とされる教養	**実践力**	**自己表現**
主に教養科目群では、身の回りの問題からスタートして、現代社会の多様な在り方を見ていきます。そうすることで、現代社会で必要とされる教養が自ずと身に付いてきます。	全科目を通して、問題意識と自らの意見を持ち、それを伝える力を養います。特に「WRD（ワード）」では、基礎的能力である「書く」「読む」「議論する」を実践的に身に付けます。	自己表現の手段として欠かせない外国語やコンピューターのスキルを磨き、また少人数の授業で受講者同士が交流しながら自身のキャリアを考え、自ら学ぶ力を獲得していきます。

全学共通教育科目		
リテラシー科目群	WRD	「Write（書く）、Read（読む）、Debate（議論する）」という、大学での学びの基礎力を身に付ける実践的な訓練の場⇒学生の主体性を磨く。
	外国語科目	外国語（英・独・仏・スペイン・中・韓）の授業を展開。各種検定での高得点獲得を目標とする。
	IT科目	「情報受発信・問題解決能力」の獲得を目標とし、基礎から段階的に学ぶ。
教養科目群	総合科目	一つのテーマを、様々な専門領域の教員が交代で解説。異なる視点からの分析を通じて学際的な理解力を養う。
	成城学	成城学園や成城という街、成城の自然など、「成城」に関する内容で構成。講義形式のほか、キャンパスの外で行うフィールドワーク形式の授業もある。
	系列科目	九つの学問分野の基礎知識を身に付ける「基幹科目」と、各分野の最新の話題などを掘り下げる「展開科目」で構成。関心や興味に応じた組み合わせで、広く、深く学ぶ。
キャリアデザイン科目群	「成城大学 就業力育成・認定プログラム」のカリキュラムの正課授業科目。段階的に勤労意識と職業観を養う。	
国際交流科目群	「成城国際教育プログラム（SIEP）」と、海外からの交換留学生のための科目。	
データサイエンス科目群	現代社会の様々な領域で、データを理解し、それを有効に活用できる力を教養として身に付ける。	
スポーツ・ウエルネス教育科目群	運動・スポーツ活動を通じて身体についての理解を深める。 学部、学年や性別を越えた19種目のクラスで編成、身体的・精神的健康の維持と増進を図る。	